「歴史を画す攻防の要衝」

増山雄三

日本史上初の、朝廷と武家政権の間で起きた、武力による争いの事を「承久の乱」というが、それは朝廷側の敗北で、後鳥羽上皇は隠岐に配流され、以後、鎌倉幕府は朝廷の権力を制限し、京都に朝廷を監視する六波羅探題をおき、皇位継承等にも影響力を持ち、幕府主導の政治体制を固めた。

承久三年（一二二一年）五月、三代将軍源実朝が甥の公暁に暗殺されたのを機に、後鳥羽上皇は、執権北条義時の朝廷への対応を見極めて、義時排除をめざし、「流鏑馬揃え」を口実に追討の院宣を発し、北面の武士ほか在京の武士など、約千七百騎を集めた。

また同時に、近国の関所を固めさせ、京方の士気は大いにあがり、「朝敵となった以上は、義時に参じる者は千ほどだろう」と、タ

力をくくっていたが、これに対する義時方の東国武士は、万を下らない数と想定され、事実、北条政子が動揺する御家人を鎮め、上皇はこの戦いに敗れてしまった。

この争乱は、今年でちょうど八百年を迎えるが、歴史の転換点となり、政治の主導権が朝廷から武士に移り、以来六百五十年、明治維新まで武士の優位は続いていくのである。

それでも、それは時代を画す合戦ではあったが、なぜか影が薄いというのは、「**中世の公家・京都と武士**」を研究する、京都文化博物館の長村学芸員は、これに関する史料の少なさを挙げている。

その理由を長村さんは、「上皇敗北は驚天動地の出来事だったが、上皇との関係で罪に問われるのを恐れ、記録の多くが処分されたようだ」といい、加えてあと一つは、結末の曖昧さを指摘している。

この乱は、上皇への権力集中を許した「**院政**」にも起因していて、幕府は先に話したよ

うに、その後、朝廷の人事へも介入するが、院政の仕組みは、そのまま存続させた。

そして、天皇・上皇・貴族と、武士は対立もしたが手を組む事があり、承久の乱は、朝廷と幕府が互いの体制を、崩壊させようとした戦いではなく、上皇が、倒幕ではなく単に義時排除を狙った、というのが背景の様だ。

それで、そもそも上皇と幕府との関係は、どうだったのかと言うと、三代将軍源実朝の「**金塊和歌集**」にそれはあり、「山はさけ海はあせなむ　世なりとも　君にふた心　わがあらめやも」とあり、たとえ山が裂け、海が干上がる世になろうとも、上皇にそむくことはありません、と歌っている。

その後鳥羽上皇と言う人物は、極めて多芸多才で」、「**新古今和歌集**」を自ら編纂するような、学芸に優れるだけでなく、武芸に通じ狩猟を好む異色の天皇であり、それまでの北面の武士に加えて、西面の武士を設置し、軍事力の強化を図ったが、その財源は、諸国

に置いた膨大な荘園群にあった。

そして実朝は、このように歌に秀でた上皇とは歌で結ばれ、また二代頼家は蹴鞠でもって上皇と結ばれ、初代頼朝が官位を授かったように、源氏の三代は、東国支配をこれまで以上確かなものにするため、朝廷の権威を最大限に活用し、後ろ盾にしたのだ。

一方、上皇の方も都の警備などに、在京の御家人を充てるなど、持ちつ持たれつの関係だったが、北条氏の台頭で変化が兆し、頼朝の死後、幕府は北条時政ら御家人の合議制になり、のち、壮烈な権力争いを繰り広げた。

それで、頼朝の側近だった梶原景時に繋がる比企能員は殺され、時政は実朝を殺し後妻の娘婿だった、平賀朝雅を擁立しようとしたが失敗し、時政の子だった義時に追放され、また、頼朝以来の和田義盛も敗死した。

このとき既に、梶原景時も北条氏に殺害されており、三代実朝も甥の公暁の手にかかっていたので、これによって、源氏三代の幕府

は終った時、上皇は摂津国地頭の免職を求めたが、北条義時はそれを拒んだ。

そこで、義時追討の院宣を発布した上皇側は、かなり楽観的だったようで、その様子を「**承久記**」は、≪朝敵となり候手は、誰かは一人も相随ひ候可き。推量仕り候ふに、千人計りには過ぎ候はじ≫とあり、つまり、朝敵となった義時に付き従うのは、千人に満たないとの見方があった、と記すのである。

ところが状況は、頼朝の妻で、「**尼将軍**」と呼ばれた北条政子の言葉で一変し、それを「**吾妻鏡**」は、政子が御家人を御簾のそばに招き、人を介して「その恩は山より高く、海よりも深い」と伝えたとする。

それによって、上皇から追討の院宣を聞いて、動揺していた御家人たちは、政子の言葉を聞いて、亡き頼朝の御恩のもとに結束し、それから僅か一月、鎌倉から攻め上がった幕府軍は、京都に入って勝利し、後鳥羽ら三上皇は配流されるのである。

それで、期せずして武士の優位を決定つけてしまった後鳥羽上皇は、流された隠岐に辿りつき、≪我こそは　新嶋守よ　隠岐の海のあらき波風　心してふけ≫と詠むが、彼は、刀や弓の鍛錬にも励む、武の人でもあったこともあり、この歌からは、万能の人ならではの、孤独が感じられる。

ところで、鎌倉幕府軍の勝利というのは、宇治川の攻防で決定付けられたとされるが、それを「承久記」は、≪京方より奈良法師、土護覺心・園音二人、橋桁を渡て出来り。人は這々渡橋桁を、是等二人は大長刀を打振りて、跳々曲を振舞てぞ来たりける≫と記す。

こうした、合戦の模様を再現する「承久記絵巻」が、京都市の京都文化博物館で開催された特別展、「よみがえる承久の乱　後鳥羽上皇VS鎌倉北条氏」で公開されたが、絵巻は江戸時代初期の作とみられ、宇治川を挟んで京方と鎌倉方が対峙するさまが描かれていて、約八十年ぶりに再発見されたものだ。

宇治は、奈良と京都それに滋賀を結ぶ要衝にあり、この地を流れる宇治川は、それまでも度々合戦の舞台となってきたが、一一八四年には、源義仲が源義経に敗れ、後に討ち取られ　また、一五七三年には、織田信長軍と足利義昭の「槇島城の戦い」で、室町幕府が事実上滅亡したし、また、これに先立つ、平清盛と平家一門の興亡を描く「平家物語」にも、宇治川を挟んだ攻防の描写がある。

宇治川沿いの、方生院に立っている「宇治橋祈祷碑」には、宇治橋というのは六四六年に、奈良元興寺の僧侶だった、僧道登が架けたものと記し、「続日本記」には、同じ寺の僧道昭が架けたとある。

その宇治橋は、度々起る洪水や戦乱の舞台になってしまい、失われる事もあったが、その都度、架け替えられているとはいえ、国内で現在見られる橋としては、最古の歴史を持っている、貴重なものだという。

令和三年五月